体験を力に ⑤

度重なる台風の接近 対応は万全であったか

指導部顧問 松浦一宇

出穂期前後の水管理良否で明暗がわかれる

イネづくりの最終ステージ（出穂期～登熟期）と台風シーズンとがかさなることから、農家は収穫するまで気が抜けないのが常である。

今年も迷走台風（10号）など8月中旬から9月上旬にかけて、立て続けに日本列島に襲来、接近して、強風や大雨、フェーン現象などの異常気象をもたらした。

庄内・由利地域は、イネの生育や生長に甚大な被害はなかったようであるが、フェーン現象による早期の葉枯れなどにより登熟低下すると思われるイネも散見された。

写真①は台風によるフェーン現象時に補水（かん水）がなく、乾き過ぎたため蒸散作用の激しい上位葉の葉先が枯れてしまった状態を写したものである。

写真②は一枚の圃場でも上位葉の葉先枯れや下位葉も水管理の不手際で早々に枯れ上がり生葉数が非常に少なくなった為に、生き残った数少ない葉に栄養が集中し、葉色が濃くなった。一方、用水路周辺の乾きにくい健全なイネは淡く、一枚の圃場でも葉色の濃淡にはっきりと表われている。

知っておきたい対策と対応

(1) 耕整の亀裂等で縦に漏水、水持ちの悪い圃場はペントナイト等を数年に渡って施用し保水力を高める（漏水の防止）。

(2) 出穂前後はイネ一生で一番水を必要とする時期であり、乾き過ぎは厳禁。

小用水路（作溝）の重要性

豊満な実りで美味しい「お米」を多収穫するためには、台風襲来時も含め、こまめな水管理で刈取り直前まで根の活力を維持することが重要である。

特に、台風等での非常時には、かん水をしたいが水利が込み合っていたり、収穫時の「ぬかるみ」が気になってかん水を躊躇して被害を大きく受けてしまう事例が昔から多くあったように感じている。

尚、刈取り間際に短期間で圃場を乾かしたり、春先、雪解け早々から圃場を乾燥し易くする手段として、既存の暗渠に十字に弾丸暗渠等で連結して暗渠の水甲を抜くと短期間で地耐力が確保されたり、中干しや根の健全育成にも活用できる条件整備となるものである。

①フェーンによる葉先枯れのイネ

②健全イネと障害イネで葉色に濃淡

③紋枯病の蔓延したイネ

紋枯病の恒常化を防ぐ

今年は、天気に恵まれた事もあってか病害虫による被害は少なかったようである。

特に、イモチ病は箱処理剤の普及でほとんど見られなくなった。

一方で、紋枯病と稲こうじ病は恒常化している圃場が目につくようである。

今年は出穂期に晴天日が多かったことから稲こうじ病は少なかったが、写真③にあるような、紋枯病の圃場が散見された。

コンバイン体系になってからは特に、ワラと一緒に紋枯菌も圃場に置かれ越冬することから、一度紋枯病の出た圃場は防除しない限り毎年のように発生する。

対策

出穂20～10日前までにモンガリット粒剤等で防ぐことが出来る。

早い段階（10葉期頃迄）であれば紋枯病がまだ発生していないか、圃場の中央まで蔓延していないから、畦畔端5～6条の額縁だけに薬剤を散布し防除できる。

少費・省力で効果も高いので恒常化している圃場では実施したいものである。

尚、稲こうじ病にも効果ありとなっているようである。また、モンガリットの使用は収穫45日前までとされているので留意されたい。

青田作りの倒伏イネと生育不良のチャランチャランイネ

写真④は基肥量（チッソ）が多過ぎ、青田の作り過ぎになって出穂後間もなく倒伏してしまったイネである。

写真④の対策と対応

(1) 稈長が伸び易い品穂「ひとめぼれ」「コシヒカリ」等は、品種の特性を熟知し、基肥は控え目にする。

(2) V字肥効で下位節間の伸長を抑える。

(3) 堆肥や鶏糞等のやり過ぎに留意する。

(4) ケイ酸資材を施用してイネの珪質化に努める。

写真⑤の対策と対応

初期生育から一環して生育不良によるチャランチャランなイネで、圃場の水持ちも悪く、ヒエも繁茂している風車型のイネである。

(1) ネズミやケラ穴をふさいだり畦畔塗等をして漏水防止に努め、初期の保温効果、除草効果を高める。

(2) 健苗育成に努め、素早い活着と初期生育の促進拡大を図る。

(3) 弁当肥や側条施肥等による初期生育の促進拡大を図り、健全多収を目指しましょう。

④基肥過多で青田の作り過ぎによる倒伏イネ

⑤漏水が激しく、イネはチャランチャランヒエぼうぼう